

植民地下朝鮮、そして在日を生きぬく詩人であり思想家の思索の全て!!

金時鐘コレクション

全12巻



推薦

高銀(詩人) 鶴見俊輔(哲学者) 吉増剛造(詩人)
金石範(作家) 辻井喬(詩人・作家) 佐伯一麦(作家)
四方田犬彦(映画史・比較文学) 鶴飼哲(フランス思想)

*四六変判上製 各巻予 380～500頁
予各 2800円～

*各巻に解説、あとがき、月報、口絵2～4頁、
巻により新規著者インタビューなどを収録

*2018年1月発刊/年4回配本

- 1 日本における詩作の原点——詩集『地平線』ほか未刊詩篇、エッセイ……………解説・佐川亜紀
月報＝野崎六助/高田文月/小池昌代/守中高明
(第3回配本/2018年6月刊) 440頁 3200円 ISBN978-4-86578-176-2
- 2 幻の詩集、復元にむけて——詩集『日本風土記』『日本風土記Ⅱ』……………解説・宇野田尚哉、浅見洋子
月報＝石川逸子/たかとう匡子/金鐘八/河津聖恵
(第1回配本/2018年1月刊) 400頁 2800円 ISBN978-4-86578-148-9
- 3 海鳴りのなかを——長篇詩集『新潟』ほか未刊詩篇……………解説・吉増剛造
- 4 「猪飼野」を生きるひとびと——『猪飼野詩集』ほか未刊詩篇、エッセイ……………解説・富山一郎
月報＝登尾明彦/藤石貴代/丁章/呉世宗
(第5回配本/2019年6月刊) 440頁 4800円 ISBN978-4-86578-214-1
- 5 日本から光州事件を見つめる——詩集『光州詩片』『季期陰象』ほかエッセイ……………解説・細見和之
- 6 新たな抒情をもとめて——『化石の夏』『失くした季節』ほか未刊詩篇、エッセイ……………解説・鶴飼哲
- 7 在日二世にむけて——「さらされるものと、さらすものと」ほか 文集Ⅰ……………解説・四方田犬彦
月報＝鄭仁/高亨天/音谷健郎/大槻睦子
(第4回配本/2018年12月刊) 456頁 3800円 ISBN978-4-86578-189-2
- 8 幼少年期の記憶から——「クレメンタインの歌」ほか 文集Ⅱ……………解説・金石範
月報＝倉橋健一/西世賢寿/瀧克則/野口豊子
(第2回配本/2018年4月刊) 424頁 3200円 ISBN978-4-86578-168-7
- 9 故郷への訪問と詩の未来——「五十年の距離 月より遠く」ほか 文集Ⅲ……………解説・多和田葉子
- 10 真の連帯への問いかけ——「朝鮮人の人間としての復元」ほか 講演集Ⅰ……………解説・中村一成
(次回配本)
- 11 歴史の証言者として——「記憶せよ、和合せよ」ほか 講演集Ⅱ……………解説・姜信子
- 12 人と作品 金時鐘論——在日の軌跡をたどる

藤原書店

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 523

TEL 03-5272-0301 / FAX 03-5272-0450 *表示の価格は税別

e-mail info@fujiwara-shoten.co.jp http://www.fujiwara-shoten.co.jp/

日本の若き読者へ

金時鐘

私は何十年もの間日本語で詩を書いてきて、人生の旅路の果てに至っている在日朝鮮人の金時鐘というものです。日本語ではキンジシヨウと言い、原音読みではキムシジョンと言います。この二通りの呼び方は私が小学生のときから習慣づいている呼び名ですので、そのどちらで呼ばれても私は構いません。要は苗字が一字の朝鮮人であることがわかれば、それで十分なのです。私は八十八年もまえ、かつての日本が植民地統治をしていた朝鮮で生まれて、日本が太平洋戦争に敗れる十七歳まで天皇陛下に忠義を尽くす、皇国少年として育ちました。したがって言葉も、日本語だけが唯一の国語として習わされました。そのような私に八月十五日の「解放の日」は突然やってきました。望んだこともない「解放の日」に出会って、それまで営々と身につけてきた唯一の「日本語」が、白日にさらした印画紙のようにとたんにまっ黒にくろぐずんでしまったのです。なんの用もなさない闇の言葉になってしまいました。

言葉は人の意識でもあるものです。私の意識の下地は因縁の絡んだ、日本語という特定の言葉で敷きつめられています。生きる手立てにその日本語を使って、かつての宗主国であったこの日本で物書きの端くれとして生きていきます。

〈金時鐘コレクション〉はそのような私の、精神の遍路を刻んだ十二分冊の本です。戦前戦後の記憶はつとに遠のいて、戦前回帰の風潮すらうごめいている昨今です。私は数少なくなつた植民地亜日本人の生き残りですので、日本の近現代史の陰にかくれている小さい陰の顔の一人でもあります。私のこの晴れやかな生痕跡には歴史文献ではうかがえるはずもない、



近代百年の個々人の心情の鬱積が込もっています。へだたりがちな朝鮮(総称としての朝鮮)と日本の関係を知る、せめても手がかりの一つとなつて戦後の平和な時代に成長している日本の若い読者たちに届いていくつくれるよう、心から深く念じています。

◆金時鐘 略年譜

- 一九二九年 一月、釜山で出生。
- 一九三六年 元山市の母方の祖父のもとに一時預けられる。
- 一九三七年 母の実家のあった済州島で普通学校に入学。
- 一九四二年 光州の中学校に入学。
- 一九四五年 八月十五日、日本の敗戦による植民地統治からの解放を、済州島で迎える。
- 一九四八年 済州島四・三事件に、蜂起した側のいちばん若い活動家として関わる。
- 一九四九年 六月、命からがら日本にわたり、大阪へ。
- 一九五一年 十月、在日朝鮮文化人協会結成。『朝鮮評論』創刊に参加。
- 一九五三年 二月、『ヂングレ』創刊(一九五九年二月)。
- 一九五五年 十二月、第一詩集『地平線』刊行。このころから総連による批判の矢面に立たされる。
- 一九五七年 十一月、第二詩集『日本風土記』刊行。
- 一九五九年 六月、「カリオンの会」を結成。
- 一九六三年 創作活動への制限を受け、書く行為から遠ざかる。第三詩集として予定していた『日本風土記Ⅱ』の刊行も途絶。
- 一九六八年 六月、静岡地裁で金嬉老事件第一回公判の特別証人の一人として陳述。
- 一九七〇年 この年から組織活動から離れる。八月、第三詩集『新潟』刊行。
- 一九七三年 九月、兵庫県立湊川高校の教員に(一九八八年)。
- 一九七八年 十月、第四詩集『猪飼野詩集』刊行。
- 一九八〇年 五月、光州事件の始まりとともに、事態の推移を見据えた連作の執筆に取り組む。
- 一九八三年 十一月、『光州詩片』刊行。
- 一九八六年 五月、『在日』のはざままで(立風書房)刊行(毎日出版文化賞を受賞)。
- 一九九八年 十月、四九年ぶりに済州島を訪問。
- 二〇一〇年 『金時鐘四時詩集 失くした季節』(藤原書店)で第四十一回高見順賞を受賞。
- 二〇一一年 三月十一日、高見順賞授賞式のため上京のその日に、東日本大震災に遭遇。
- 二〇一五年 『朝鮮と日本に生きる——済州島から猪飼野へ』(岩波新書)で第四十二回大佛次郎賞を受賞。

FAX 03-5272-0450

info@fujiwara-shoten.co.jp

藤原書店 〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523 電話 03-5272-0301

[] セット 『 金時鐘コレクション 全 12 巻 』
 [] 部 『 金時鐘コレクション 第 巻 』
 [] 部 『 金時鐘コレクション 第 巻 』
 [] 部 『 金時鐘コレクション 【内容見本】 』

お名前

お電話番号

()

ご住所 〒